4　宇田荻邨　渓澗　二曲一隻

昭和二年（一九二七）　絹本着色
本紙一九三・四×一八〇・八

宇田荻邨（一八九六～一九八〇）は、晩年の菊池芳文に入門し、その養嗣子菊池契月にも引き続き絵を学んだ画家である。大正時代の半ばまでは陰鬱な色彩で妖艶美を追究した作風を展開するが、大正十三年の第五回帝展出品「巨椋の池」から徐々に古典への憧憬に現実の写生を組み合わせた情感豊かな作風へと移行していった。そして第七回帝展出品の「淀の水車」（大倉集古館蔵）が特選および帝国美術院賞を受賞し、さらにその翌年の第八回帝展において本図が宮内省買上となったことで、その評価は決定的なものとなった。

本図は陽光の射し込む渓谷で鳥たちがにぎやかに遊ぶ景色を描いたものであり、この時期の作者の特徴である清明な色彩表現が美しい。宇田の絵については、当時から狩野山楽をはじめ桃山屏風の影響が指摘されており、たしかに松樹と岩塊、瀑布によって構築した画面に禽鳥を配す構成は桃山の障壁画を連想させる。また師の菊池契月が語るところによると、宇田は風雅な大和絵様式に憧れ、平安時代の「扇面古写経」や「平家納経」などまで遡って研究していたという。本図においても意匠化された波の描写や色彩のアクセントとして金泥を効果的に使用する点にはそうした古典の影響がうかがえる。しかし松の幹の陰影表現や滝の裏側に見え隠れする岩の描写などは非常に写実的であり、作者が古典の要素と現実性を近代的感覚で統合しようとしていたことがわかる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections